

Title	ウィーン学団における科学と政治
Sub Title	Die Wissenschaft und Politik im Wiener Kreis
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.12 (1975. 12) ,p.35- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19751215-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウイーン学団における科学と政治

小野修三

序論

第一章 ウイーン学団の形成と形而上学批判

第二章 オットー・ノイラートとドイツ革命

結論 —— オットー・ノイラートにおける科学と政治

序論

現代アメリカの科学史家トーマス・クーンは、一九六五年に開催された科学哲学に関する国際会議の席上で、自分の関心が「科学的研究の諸成果の論理構造よりも、むしろ科学的知識が獲得されてゆくダイナミックな過程」にあり、かつ、この点についてはカール・ポパーの関心対象と一致をみていると語った。

ポパーはその『科学的発見の論理』において、「経験的な科学体系にとつては、経験によつて反論されることが可能であらねばならない」と述べ、科学と非科学との間の境界設定の基準はこの反証可能性であると主張し、また『客観的知識』

においては、 P_1 (ある問題) \downarrow TT (暫定理論) \downarrow EE (錯誤排除) \downarrow P_2 (新たな諸問題) という図式をかかげ、これが「体系的な合理的批判による錯誤排除を通じての知識の発達の図式」⁽³⁾ なのだと言張している。

これに対し、クーンはその『科学革命の構造』において、個々の科学者の思考過程と彼をとりまく科学者コミュニティとの関連に着目するという意味での心理学的、社会学的なアプローチを導入して歴史研究を行ない、これによつて通常科学と科学革命を区別し、ポパーの用語を用いて言えば、科学と非科学との境界設定の基準はひたすら科学的知識の精密さや適用範囲を増大させる通常科学の方にあるが、知識の発達、つまり新たな知識の成立は科学革命において行なわれる、と主張している。

このようにポパーとクーンはともに「科学的知識が獲得されてゆくダイナミックな過程」に関心を抱き、そして両者とも「科学は累積によつて進歩するという見方を認めず、その代りに両者とも旧来の理論が退けられ、そしてそれとは相容れぬ新しい理論によつて置きかえられる革命的な過程を強調している」⁽⁵⁾ にもかかわらず、科学と非科学との境界設定の基準については見解に差異が生じてきている。クーンという通常科学においては批判的な議論は断念されており、ポパーにおいては批判的な吟味がなされなければ科学とは呼べない。

この差異を生じさせた原因の一つには、それぞれの発想の根底における差異があると思われる。理論形成の出発点で、ポパーは学問外的な要因から、クーンは学問内的な要因から影響を受けたのである。

一九〇二年生まれのポパーは、自分の若き日を回想してこう語っている。「オーストリア帝国の崩壊後、オーストリアには革命が起つていて、オーストリア全体が革命的なスローガンや思想、それに目新しくしてしばしば乱暴な理論にあふれていた。私の関心を惹いた理論のなかでは、アインシュタインの相対性理論が紛れもなく群を抜いて最重要なものであつた。

そのほかは、マルクスの歴史理論、フロイトの精神分析およびアルフレート・アドラーのいわゆる『個人心理学』の三

つであつた。⁽⁶⁾「これらのうちで、アインシュタインの理論は科学と、マルクス、フロイトおよびアドラーの理論は非科学と彼によつてみなされることになるのだが、後者の三理論について「私がますます不満を感じ始めたのは一九一九年の夏の間のことだつた。……そして私は、それらが科学としての資格を主張する権利に疑いを抱き始めた。「科学と非科学とをいかに区別するかという」私の問題はおそらく最初は、『マルクス主義、精神分析それに個人心理学のどこが悪いのか、どうしてそれらは自然科学の諸理論と、ニュートンの理論と、そしてとりわけ相対性理論とそんなに違うのか』という単純な形態をとつたのである。⁽⁷⁾」

そしてポパーはのちにその『歴史主義の貧困』や『開かれた社会とその敵』において明確にマルクス主義を否定し、そしてそれに代わる漸次的社会工学という考え方を提示することになるのであるが、ポパーにとつてはその理論形成の最初から非科学は、欠陥があるがゆえに廃されるべきものという否定的な価値判断が下される対象であつた。そしてその彼の主観的価値判断こそ、当時の革命的な政治状況への彼の態度表明なのであつた。⁽⁸⁾

これに対し、クーンの言う非科学は何ら廃さるべき対象ではない。科学と非科学との間に価値的な区別はつけられていない。クーンの理論形成には、アーサー・ラヴジョイの思想史研究やマイケル・ポラーニの認識論からの影響という学問内的な要因が大きく作用している。クーンの関心は、「ある一定の人たちが表明する教義ではなく……、彼らをそこに導いてきたもろもろの動機や理由⁽¹¹⁾」を問題にするラヴジョイに一致し、また「理論は科学者たちが科学的見解の權威に基づき受け入れるもろもろの仮定から出発し……、科学者コミュニティの生命は科学の伝統を強いるところに……ある⁽¹²⁾」と主張するポラーニに一致した。

したがつて、クーンの理論に見いだされる主観的要素は、ポパーのように理論構築の土台の個所ではなくて、理論それ自体の方法論としてであるといえよう。

この差異は私にとつて重要である。というのは、理論の方法論としての主観的なものではなく、理論家における主観的なものに本稿では注目したいと思うからである。

私は本稿において近代科学の成立以後、科学と政治との間に常に存在してきた作用関連を科学者における主観的なものに注目することで明らかにしてみたいと思う。すなわち、科学者が権力あるいは政治をいかなるものと主観的に認識しているかということ、科学者が科学者としての研究を続けることとの関連を、一九二〇年代に形成されたウィーン学団を構成した一群の人たちの場合について論じたいと思う。

とくに本稿では、その中心的メンバーの一人であり、のちに「科学の統一」運動のエネルギーな推進者として活躍したオットー・ノイラートに焦点をあわせ、彼が科学的な態度をあくまで堅持しながら、どのようにして政治にかかわつていったかを探り、彼の内部における科学と政治の関連をとらえてみたい。以上の問題に取り組む前に、ここではまず現代における科学と政治とのかかわり方の一断面をとりあげ、現代では科学者が意図せずとも、科学者は政治にかかわることを、本稿における基本的視点である科学者における主観的なものに着目することで明らかにしておきたい。

現代国家における科学の位置について、日本の一科学史家は次のように述べている。「科学が国家と産業のそれぞれに包摂され、研究開発において国家と産業が癒着することによつて、国家・産業・科学の三位一体ができあがる。科学はこんちの社会体制をしてまさに体制たらしめる、本質的契機の一つとなつたのである。こんにちの科学は現存の社会体制の隅々にはいりこみ、それを維持する不可欠の要素となつた。」⁽¹³⁾

今日からみると、この過程は当然起るべくして起り、スムーズに進行してきたかのように思われるかもしれない。だが、現実には、この科学者と国家の指導者との協力関係は、それほど容易に成立することはなかつたのである。⁽¹⁴⁾この関係に理論的な裏付けを与えた最初の人物は、一七世紀前半に活躍した大法官フランシス・ベーコンだつたが、人類の進歩のために科学

と技術と産業を結びつけようという彼の思想は、一八世紀末のフランス革命において一つの結実をみる。このフランス革命、とりわけそれがもたらしたエコール・ポリテクニク、すなわち革命戦争遂行のために必要な技術者を育成するという軍事目的に比べ、さらに産業の発達によつて促された科学や技術の進歩への要請に答えるべき教育制度の誕生⁽¹⁵⁾を境にして、科学者と国家の指導者との関係は明らかに変化をみせ、両者の間の協力関係は今日では自明なものとなつている。そして、こうした事態は、非西欧社会である日本においても本質内在的な問題である。

昭和四九年度の『科学技術白書』では、「我が国は、資源に乏しく、狭小な国土に一億余の国民が世界に類を見ない高密度社会を営んでいる。このような条件のもとで一層多様化し、高度化する社会・経済の要請にこたえていくため、科学技術が寄与すべき問題は、数多くあり、科学技術の重要性は飛躍的に高まつている⁽¹⁶⁾」という科学技術への要請が政府の側から表明されているが、日本学術会議はこれに対して、「科学の歴史における最大の最も困難な問題は、科学のあり方が国家権力の動向によつて多大の影響を受けてきた点にある。国家あるいは政治権力は、実用的な目的から、あるいは装飾によつて自己の荘厳化をはかる目的から、常に科学や科学者を選別し、思うままに操縦してきた。『政治の論理』が科学を支配してきたのである。『政治の論理』に対して『科学の論理』を対置する必要がある⁽¹⁷⁾」という、一見反撥するかのような発言を行なつてきた。しかしながら、日本学術会議は同時にその目的が「わが国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させる⁽¹⁸⁾」ところにある、とも表明しているのである。つまり、科学者がこのような形での社会的責任を果そうとしているならば、政府からの特別の要請がなくとも、科学者は必然的に『政治の論理』に関与する。なぜなら、科学を「行政、産業及び国民生活に反映浸透させる」際には、『政治の論理』が貫徹するからである。国家権力の『政治の論理』に対抗しうるのは、『科学の論理』ではなく、もう一つの『政治の論理』である。

いいかえれば、科学者と政治権力者との協力関係は、科学者が権力あるいは政治を否定的に評価するか否かによつて変化

するのではなくて、前述したように、科学者が権力あるいは政治をいかなるものと主観的に認識しているか、この場合でいへば、自分たち科学者がその研究成果を社会的に実践する際に、その行為が政治的行為であると気づくか否かによつて変化するのである。

だが、こう言つたからといつて、私は科学と政治の区別など存在しないと主張しているわけではない。ただ、科学的行為と政治的行為などのその他の諸行為とが重なり合う場合、その二種の行為を区別するためには領域的な区画ではなくて、行為側の態度の相違に着目しなければならないように思われる。

科学的行為の際立つた特徴は、事物に即く態度^{ザアヘリッヴェヒカイト}である。⁽¹⁹⁾つまり、対象を自己の欲望から隔離し、自己の恣意を抑圧し、それ自体として観察・認識するという一種の禁欲的態度である。いかえれば、自己の欲望——それが金銭的なものであろうと、芸術的なものであろうと、政治的なものであろうと——の満足のゆくように対象を構成することは否定するが、そのような欲望が科学者のうちに存在すること自体は決して否定するものではない。したがつて、科学者が科学者であらんとする限りにおいて、そのような欲望の実現はあくまで意図したものとしてではなく、単に付随的に生ずるにすぎない。(ただし、そのようなことが付随的に生ずるといふことは予想可能であらう。)

科学者と政治権力者が協力する際には、だから、科学者がザッハリッヒな態度をとり続けると同時に、その科学者がさまざまな利害とあるいはまた理念と結びつく場合も十分にありうるのである。

(1) Thomas S. Kuhn, "Logic of Discovery or Psychology of Research?," Imre Lakatos & Alan Musgrave, eds., *Criticism and the Growth of Knowledge* (London: Cambridge University Press, 1970), p. 1.

(2) Karl R. Popper, *The Logic of Scientific Discovery* (London: Hutchinson, 1959), p. 41. 大内義一・森博訳『科学的発見の論理』上 恒星社厚生閣、一九七一年、四九ページ。

(3) Karl R. Popper, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach* (London: Oxford University Press, 1972), p. 127. 森博訳

『客観的知識——進化論的アプローチ』木鐸社、一九七四年、一四〇ページ。

- (4) Thomas S. Kuhn, "The Structure of Scientific Revolution," *International Encyclopedia of Unified Science*, Vol. II, No. 2 (Chicago: University of Chicago Press, 1962), pp. 52, 92ff. 中山茂訳『科学革命の構造』タキチ書房、一九七一年、五八—一〇四ページが主。
- (5) I. Lakatos & A. Musgrave, eds., *op. cit.*, pp. 1-2.
- (6) Karl R. Popper, "Science: Conjectures and Refutations," *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963), p. 34. 黒田東彦訳『科学——推測と論駁』清水幾太郎編『現代思想』・批判的合理主義』タキチキョウ社、昭和四九年、六二—六三ページ。
- (7) *Ibid.* 同書六一—六二ページ。
- (8) Karl R. Popper, "Intellectual Autobiography," Paul A. Schilpp, ed., *The Philosophy of Karl Popper* (Illinois: Open Court, 1974), pp. 23—29.
- (9) T. Kuhn, *op. cit.*, p. vi. 中山訳『科学革命の構造』二二—二三ページ。
- (10) Thomas S. Kuhn, "The Function of Dogma in Scientific Research," A. C. Crombie, ed., *Scientific Change* (London: Heinemann, 1963), p. 347.
- (11) Arthur O. Lovejoy, *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1936), p. 5.
- (12) Michael Polanyi, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy* (New York: Harper & Row, 1964), p. ix.
- (13) 廣重徹『科学の社会史——近代日本の科学体制』中央公論社、昭和四八年、一三二—一三三ページ。
- (14) たぐねはら W. H. G. Armytage, *The Rise of the Technocrats: A Social History* (London: Routledge & Kegan Paul, 1965), p. 32. 赤木昭夫訳『テクノクラートの勃興』筑摩書房、昭和四七年、三九—四〇ページ参照。
- (15) F. A. Hayek, *The Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason* (Glencoe, Ill.: Free Press, 1952), pp. 110-111. なお、このハイエクの著書の副題は「理性の濫用に関する研究」であるが、ヒュール・ホリタタニークが「この時代に、他の誰よりも『科学』の政治・宗教および社会的諸問題に対するより正確で、より満足のゆく解決策を知っている」と自らを誇る(Hayek, *ibid.*, p. 113)卒業生を世に送り出したことでも、そのことをもって直ちに理性の濫用とは言えないと思われる。なぜなら、革命の理念があつて初めて可能だった状況と、人々がもはや革命の理念とは無関係に「生活を科学的な観点からながめがむようになった」(Armytage, *op. cit.*, p. 65, 赤木訳『テクノクラートの勃興』七九—八〇ページ)というテクノクラシーの状況とは同一ではなかつたのである。
- (16) 科学技術庁編『科学技術白書・昭和四十九年版』大蔵省印刷局、昭和四十九年、一—二ページ。

(17) 日本学術会議編『一九七〇年代以降の科学・技術について』大蔵省印刷局、昭和四七年、二七ページ。

(18) 同書、四〇ページ。

(19) この態度をつらぬいたという意味で、マックス・ウェーバーはまさしく科学者であつた。安藤英治「マックス・ウェーバーにおける『客観性』の意味」『マックス・ウェーバー研究』未来社、一九六五年、一一五—一五四ページ参照。

第一章 ウィーン学団の形成と形而上学批判

第一節 ウィーン学団の形成

ウィーン学団については、わが国でも夙にさまざまな形で紹介や批判がなされてきており、それらによつて一九二二年のモーリッツ・シュリックのウィーン大学教授就任から一九二九年のウィーン学団の綱領宣言たる『科学的世界把握——ウィーン学団』⁽²⁾の出版、そして一九三〇年代からのファシズムの脅威によるメンバーの離散に至る過程についてはほぼ知ることのできるので、私は本節においては、従来わが国では問題にされてこなかつた側面、つまり学団の結晶核となることになるシュリックは、毎週木曜日の晩に定期的にもたれてはいたが、インフォーマルなものであつた研究会を、インフォーマルなもののままにしておきたかつたのであつて、ウィーン学団形成ということが彼の意図するところではなかつたという点だけを紹介しておきたい。

一九二九年の春と夏に、シュリックはカリフォルニアのスタンフォード大学への客員教授としてアメリカに渡り、同年の一〇月にウィーンに戻つたのだが、その彼の留守中に、ウィーン学団の「成立史ならびに参加者、この研究会の立場ならびに目標を簡潔に叙述した」⁽³⁾小冊子たる『科学的世界把握——ウィーン学団』⁽³⁾は出版されたのであり、いわば主役抜きの旗上げであつた。

シュリックの事後承認をとる形になつたのは、「彼は哲学上の個人主義者だつたのであり、集団会議を奨励し、相互批判と

綿密な討論の実り豊かさを信じて疑わなかつたにもかかわらず、彼は誰もが皆自分自身で考えるべきだと深く確信していた。哲学上の攻撃の統一戦線という考え方はシュリックには相容れぬものだつた⁽⁴⁾ということが、シュリックを囲み、すでにかなりの議論を積み重ねてきた人たちにはわかっていたからであり、『ウイーン学団』という固有名詞に間違いなく異議を唱えるであろうシュリックがちやうど海外にいつて不在だつたこと、そして同二九年九月半ばにプラハで開かれたドイツ物理学会とドイツ数学者会議に一つの独立の団体として臨もうという外的動機が引き金となつて、「科学的世界概念についての……宣言文を作成するのに十分な力を蓄えていた」⁽⁵⁾一群の人々のクライス⁽⁶⁾は、『科学的世界把握——ウイーン学団』を出版し、ウイーン学団はここにその第一歩をしるしたのであつた。

このウイーン学団の成立の一年ほど前に、彼らの見解の普及を目的としたエルンスト・マツハ協会が設立されており、このエルンスト・マツハ協会とライヘンバッハらのベルリン経験哲学協会との共催で「精密科学の認識論のための会議」⁽⁷⁾が、先の二つの会議と平行してプラハで開かれたが、その席上で『科学的世界把握——ウイーン学団』は披露されたのである。個人と個人とを結びつけ、協力関係を醸し出すことと、そこから一つの組織をつくり出すことがまつたく別のこととして認識され、かつ後者を拒否せねばならぬという考え方を一九二〇年代から三〇年代半ばにかけて活潑に活動した経験主義的な哲学者（シュリックは物理学から哲学に移つた）がもつていたという点は、科学と政治との間の作用関連という観点からみて興味深い。というのは、シュリックが峻別したその二つの契機を、シュリックとは逆に、何らかの仕方で結びつけなければ、いかなる意味の政治も発生しないからである。

その二つの契機のうち、前者を「流動状態にある運動」と呼び、後者を「組織および制度」と呼ぶなら、「言葉の真の意味での『政治』を復権させた……場合、運動が組織および制度を覆いつくし、しかも組織と制度によつて包摂されぬ部分が運動に敵然と残つている」⁽⁷⁾のであつて、シュリックの考え方からは、この人間の自由を要求する（政治）は生まれてこない。

つまり、シュリックはこの意味での政治的志向をもつていなかったのである。彼は自由を欲したが、その自由を政治のなかにおける目標、目的として、いいえれば政治理念として考えることはなかつたのである。

この傾向は、だが、彼とは見解を異にし、ウィーン学団を出現させた当の人たちにもみられた。シュリックのように政治を拒否することがなくとも、彼らの多くは「政治的なことへの無関心や無知」⁽⁸⁾を示したのである。

彼らは「哲学的な志向をもつた科学者たちと、科学的な訓練を受けた哲学者たち」⁽⁹⁾であつた。つまり、彼らはいずれにせよ自然科学的な訓練を受けており、その影響が彼らに非政治的な態度をとらせたと考えられるように思われる。

彼らは自然科学的な訓練を受けることによつて自己の恣意、自己の欲望を第一次的に抑圧することのできる人たちであつたが、しかし彼らは研究主体の側における恣意、欲望と研究客体の側におけるそれとを区別することができなかったのではないか。近代自然科学の中心的存在である物理学は、その研究対象が恣意をもたない対象(無生物)であつたため、物理学者にとつて恣意の入る対象は説明不能であり、そのため恣意の入る対象には非常に敏感になり、そのような対象は、研究主体の側における恣意の抑圧と同時に、極力排除した結果、そういつたものは対象のなかにはそもそも存在しないと思ひこむようになったのではないか。そのようにして、恣意と同様に経験領域の外部にある、たとえば自由といつた政治理念は、物理学の方法をもつてしては扱えない対象であり、それゆえ彼らはそのような扱えない対象が扱えない対象として存在していると認めるのではなくて、そういう対象は存在しないと断定したのではなかつたか。⁽¹⁰⁾

自然科学それ自体は、このような方法論と存在論の混同を命じてはいない以上、自然科学的な訓練を受けながらも政治的志向をもつた人間も出現しうる。そのような例外的な人間がウィーン学団にはいた。オットー・ノイラートがそうである。

彼は、ウィーン学団のメンバーのほとんどが自分たちの哲学的な営為を自分たちの政治的な目的から引き離すことを欲していたのに対して、そのような中立主義的態度は社会進歩の敵を利するものだとして強く批判しえた政治的人間だつた。⁽¹²⁾そして、

彼こそ一九二九年当時、シュリッックの反対を押し切つてでもウィーン学団を成立させようとした中心人物であつた。ウィーン学団の綱領宣言『科学的世界把握——ウィーン学団』（無署名）の文案はノイラートによるものだつたし、ウィーン学団という名称も彼が考へだしたものだつた。⁽¹³⁾そして、彼は形而上学の優勢なドイツ語文化圏にあつて当初から四面楚歌だつたウィーン学団の一員として、その経験主義的哲学の対外的影響力を高めるために多に気を吐いたのである。

オットー・ノイラートは、一方において科学的訓練を受け、そしてあくまでも科学的たろうとし、他方において政治を見失わず、運動を組織化する術を心得、ファシズムへの抵抗を示した。この二つのことは、ノイラートのなかでどう結びつけられていたのだろうか。

私は次節において、ウィーン学団の主流を占めたヴィットゲンシュタインの考え方への反論として表明された彼の科学理論が、彼から実践的な活動を引きだした、その論理的経過を辿ることにする。ノイラートにおける実践的な活動は、だが、その彼の科学理論から引きだされたものばかりではなかつた。それ以前の彼の活動については、第二章で扱おう。

(一) 筆者が参考にさせていただいた邦語文献のいくつかを挙げておく。市井三郎『分析哲学——論理実証主義を含む運動の歴史と西欧民主主義』、岩波講座『現代思想Ⅵ・民衆と自由』、岩波書店、一九五七年、三二一—三五四ページ（のちに加筆の上、市井三郎『哲学的分析——社会・歴史・論理についての基礎的試論』、岩波書店、一九六三年、一九五—二二三ページ）に「分析哲学の史的展望」として収録。大森莊蔵『論理実証主義』、碧海社、一・石木新・大森莊蔵、沢田允茂・吉田夏彦共編『科学時代の哲学——論理・科学・哲学』、培風館、昭和三九年、六七—九八ページ。佐藤敏三『科学哲学とサイバネティクス』、中村領里・里深文彦編『現代の科学・技術論』三書房、一九七二年、一七二—二四二ページ。針生清人『二つの論理的原子論』、『白山哲学』第五号、東洋大学哲学会、昭和四二年六月、四二—七二ページ。また最近次の二著の邦訳がなされた。Herbert Feigl, "The Wiener Kreis in America," Donald Fleming and Bernard Bailyn, eds., *The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1968), pp. 630-673. 藤本隆忠訳「アメリカのウィーン学団」、『「命」の現代史』の「オマケ」書房、一九七三年、二二—二八〇ページ。Frank Fiedler, "Einheitswissenschaft" oder Einheit der Wissenschaft? (Berlin: Dietz Verlag, 1971). 岩崎允胤訳『自然科学と社会科学の統一』、大月書店、一九七三年。

(二) *Wissenschaftliche Weltanschauung: Der Wiener Kreis*, hrsg. v. Verein Ernst Mach (Wien: Arthur Wolf, 1929).

- (9) Victor Kraft, *Der Wiener Kreis: Der Ursprung des Neopositivismus* (Wien: Springer, 1968), S. 3.
- (10) Herbert Feigl, "The Origin and Spirit of Logical Positivism," Peter Achinstein and Stephen F. Barker, eds., *The Legacy of Logical Positivism: Studies in the Philosophy of Science* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1969), p. 4.
- (11) Robert S. Cohen, "Neurath, Otto," *Encyclopedia of Philosophy*, 5 (New York: Macmillan & Free Press, 1967), p. 478.
- (12) 『科学的世界把握——ウィーン学団』の巻末には、ウィーン学団の構成員の名が挙げられている。それは、グスタフ・ミルクマン、ルドルフ・カルナップ、ハルバルト・ファイゲル、フェリッポ・フランク、クルト・ゲーデル、ハンス・ハーン、ヴィクトール・クラフト、カール・メンガー、マルセル・ナトキン、オットー・ノイラート、オルガ・ハーン・ノイラート、テオドル・ラダコヴィッチ、モーリッソ・シュリック、それにフリードリッヒ・ハイスマンの一四名である。
- (13) 内山秀夫「政治組織と市民運動」、『第三世界と現代政治学』れんが書房、一九七四年、二五七—二五八ページ。
- (14) Rudolf Carnap, "Intellectual Autobiography," Paul A. Schilpp, ed., *The Philosophy of Rudolf Carnap* (Illinois: Open Court, 1963), p. 9.
- (15) Herbert Feigl, "Some Major Issues and Development in the Philosophy of Science of Logical Empiricism," *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, Vol. 1, 1956, p. 3.
- (16) 「形而上学は（たとえはカントが考えたように）その課題の解決が人間理性の及びえない企てであるがゆえに崩壊するのではなく、そのような課題はむしろ存在しないがゆえに崩壊するのである」と、シュリックは、『ウィーン学団の機関紙『エルクテントニス』第一巻（一九三〇—三一年）で論じて、
 19° Moritz Schlick, "Die Wende der Philosophie," *Erkenntnis*, Bd. I (1930/31), S. 9. (A. J. Ayer, ed., *Logical Positivism*, New York: Free Press, 1959, p. 56)
- (17) 「事象把握のための方法に属する概念を、いさなり事象を構成する動的契機とみてはならない。」(三七剛一『人間存在論』勁草書房、一九六六年、ハ六—七ページ)
- (18) Schilpp, ed., *op. cit.*, (1963), p. 23.
- (19) Marie Neurath and Robert S. Cohen, eds., *Otto Neurath, Empiricism and Sociology* (Dordrecht-Holland: Reidel, 1973), p. 318.

第二節 ウィットゲンシュタインの形而上学批判とオットー・ノイラート

一 一八八九年ウィーンに生まれたルドウィッヒ・ヴィットゲンシュタインは、たしかにウィーン学団の研究会に出席したことは一度もなかつたが、彼の『論理哲学論考』はウィーン学団のメンバーの関心を強く惹きつけ、シュリックやカル

ナップらの主張に色濃い影響を与え、一九二九年のウィーン学団の綱領宣言のなかにもその影響のあとを見ることが出来る。『論理哲学論考』は、一九二二年オストワルトの『自然哲学年鑑』に最初に発表され、そしてその翌年にはC・K・オグデンとF・P・ラムジーによる英訳付きで単行本として出版され、一九二〇年代の半ばごろから学団の研究会でとりあげられ、詳細に検討された。

ヴィットゲンシュタインはその『論理哲学論考』において次のように論ずる。「世界とは諸事実の総計であつて、諸事物の総計ではない」(一・一一)、つまり、世界は事物それ自体から構成されているのではなくて、諸事物が現にとつてあるあれこれの状態、すなわち事実から構成されているのである。だから、事実とは諸事態(複数のザッへのありよう)によつて存立しているのであつて、「事態とは諸対象(諸ザッへ、諸事物)の結合なのである」(二・〇一)。

この考え方には、明らかにバートランド・ラッセルの論理的原子論が反映しているわけだが、ここからヴィットゲンシュタインは、人間の認識は究極的な事実(ラッセルの言う原子的事実)に対応しているか否かによつてその真偽が判定されることになる、と考える。つまり、「われわれはわれわれに対して事実の像を作成しているのである」(二・一一)。「像とは實在のモデルである」(二・一二)。「諸対象に対し、像のなかで対応するのは像の諸要素である」(二・一三)。つまり、まず事実が存在し、それに対応させる形で像が作られてきたのだから、「像からだけでは、その像が真か偽かを認識しえない」(二・二二四)。つまり、「像が真か偽かを認識するためには、われわれはその像を實在と比較しなければならぬ」(二・二二三)。逆にいえば、像に対応すべき實在がそもそも存在しない場合には、比較それ自体が不可能なのだから、その像の真偽は問題になりえない。この状態こそ、従来の哲学が陥っている状態なのである。

すなわち、「哲学的なことから関して書れてきた命題や問いの多くは偽なものではなくて、無意味なのである。われわれは、したがつて、この種の問いにはそもそも答えられないのであつて、ただその無意味さを確認しうるのみである。哲学者

たちの問いと命題の多くは、われわれがわれわれの言語論理を理解していないということに基づいている。／……そして、最も深遠な諸問題が実際には少しも問題ではない、ということは驚くにはあたらぬ⁽¹⁰⁾」(四・〇〇三) いかえればヴィットゲンシュタインにとつて「哲学の目的とは諸思想の論理的明晰化である。／哲学は理論ではなくて、活動である。／哲学的著作は本質的に解説からなっている。／ \wedge 哲学的諸命題 ∇ ではなくて、諸命題の明確化こそが哲学の成果なのである。／哲学は、さもなければいわば濁つたり輪郭のぼやけたりしている諸思想を、澄ませたり輪郭をくつきりさせたりすべきである」⁽¹¹⁾ (四・一一二)。

それでは、そのような作業を遂行するための用具は何か。それこそ、まさに命題の無意味さを逆手にとり、實在との対応のない、したがつて外界の實在からは独立し、その内部構造のみで真であり、偽である命題(トートロジー)である。つまり、われわれの日常の不完全性に由来するもろもろの錯誤をのがれるために、「われわれは、これらを排除する記号言語を用いねばならぬ。……記号言語は、したがつて論理的文法——論理的シンタックス——に従うのである」⁽¹²⁾ (三・三二五)。「論理的シンタックスにおいては、記号の意味は決して役割を演ずべきではない。つまり、論理的シンタックスは、記号の意味に言及されることなく確定されねばならず、表現の記述のみを前提とすることが許されるのである」⁽¹³⁾ (三・三三三)。

このような哲学の課題が踏み越えられた時に、哲学は形而上学を生んできたのだから、「……語られうること以外には何も語らぬこと……」⁽¹⁴⁾ (六・五三)、つまり「語りえぬことについては、黙さねばならぬ」⁽¹⁵⁾ (七)とヴィットゲンシュタインは『論理哲学論考』を結んでいる。

ヴィットゲンシュタインは、ウィーン学団の「思想的指導者の役割を果たしていた」⁽¹⁶⁾と評されているが、その理由は「論理的なものと、経験的なものとの関係の問題に対する解答は、フラーゲ、ラッセルおよびホワイトヘッドに基礎をおくヴィットゲンシュタインの貢献である」⁽¹⁷⁾からである。すなわち、「トートロジー」という論理学の本質に対するこの洞察によつて、

われわれは論理学がア・プリオリに妥当するという主張の眞の意味を理解する。論理学は、それが分析的であるがゆえにア・プリオリなのである。かくして、従来の経験主義と実証主義が、経験的な基礎にもとづいて論理学と数学を説明しようとする際に遭遇したもろもろの難点が消滅する。総合的判断がア・プリオリであることを否定する経験主義は、今や、論理学と数学をまつたく正当に扱うことができる知識の理論を展開する位置にあるのである。⁽¹⁸⁾ いうまでもなく、ここに成立した考え方こそ、論理実証主義であつた。

二 ウィーン学団のメンバーを統一させたものは、一定の見解あるいは教義というよりも、むしろ一定の傾向と努力である。このことの証拠は、そのメンバーの間におけるたびかさなる重大な不一致や活気にあふれた討論であり、またその発展の途上において数回起つた根本的な見解の修正である。⁽¹⁹⁾「そして、このようにウィーン学団が「いつたん公式に発表した見解を自ら批判してゆくという模範を示したことが、同学団の行使した影響力の源泉であつた、といえる」⁽²⁰⁾ 以上は、われわれもウィーン学団における見解の対立や変化のあとを十分に辿らねば、この学団の眞価も理解しえないわけだが、ここではわれわれは、次のカルナップの語るエピソードとノイラートによるヴィットゲンシュタイン批判の二つを紹介するに止めたいと思う。

カルナップは当時を回想してこう語つている。「不運にもわれわれは、ヴィットゲンシュタインに従つて、ある種の形而上学的諸テーゼが『無意味』だと述べる単純化しすぎた説をもつて、ウィーン学団におけるわれわれの見解を定式化したのである。この定式化は、根本的にはわれわれと同意見の哲学者たちのいく人かの間ですら、まつたく不必要な反撥をひき起した。その後すぐにわれわれは、さまざまな意味成分を識別することが重要であることがわかり、そしてそれゆえに、もつと正確な仕方、そのような諸テーゼは認識的ないし理論的な意味を欠いていると述べた。これらはしばしば他の意味成分、たとえば、情動的ないし動機づけ的な意味といつた認識的ではないが、しかし強度の心理的効果のあるといえる意味を

もつているのである。⁽²¹⁾」

この見解の修正は、もちろん、カルナップらが形而上学そのものを承認したことを意味するものではない。彼らはなお語りえぬことには黙したのである。しかし、彼らが依拠した当のヴィットゲンシュタインは、語りえぬことには完全に黙し通したのだろうか。私はそうは考えない。彼は形而上学を愛しながらも、⁽²²⁾その知的誠実さのゆえに形而上学を退けざるをえぬという苦しみに耐えていたが、彼の『論理哲学論考』はやはり一つの形而上学ではなかつたか。より正確に言えば、彼は形而上学をもう一つの形而上学で批判するという、本来の意味での批判を行なつていたのではなかつたか。

ノイラートが『エルケントニス』第二卷(一九三二/二年)に発表した「物理主義における社会学」は、ヴィットゲンシュタインのトートロジーに関する論理学上の貢献を評価しながらも、『論理哲学論考』には形而上学が入りこんでいるという批判を展開している。私には、そのヴィットゲンシュタイン批判のすべてが正当だとは思えないが、ノイラートによる「一つの命題は、常にもう一つの命題と、あるいは諸命題の体系と比較されるのであつて、『实在』と比較されるのでは決してない」⁽²³⁾、との指摘は重要だと思われる。

先に引用したように、『論理哲学論考』の二・一では、われわれはわれわれに対して事実の像を作成している、と述べられていた。この表現からすると、**事実**は像ではないようである。しかし、**事実**もまた像と考えるべきだと私には思われる。つまり、われわれ人間には、**实在**と何の媒介もなしに向い合うことはそもそも不可能なのではないか。事実とは、現にこれこれの状態にあるとわれわれが知覚した、事物の状態のことではないか。だから、経験的に、像の真偽は像ではない**事実**と**事実**の像との間の比較によつてではなく、一つの**事実**をめぐる複数の「**事実の像**」の間の比較によつて判定されると私には考えられるのである。

ノイラートは、この比較の基準として**観察命題**(⁽²⁴⁾プロトコール命題)を考えていた。もし像と像ではない**事実**との間の直接

的な比較が經驗的に可能ならば、經驗的に絶對的な判定を下せるわけだが、われわれ人間にはこの種の絶對性は、ヴィットゲンシュタインの発見したトートロジーのような場合以外にはありえないと私には思われる。すなわち、トートロジーが絶對的であること、ア・プリオリであることは經驗的な仕方では明らかになされたのではなく、形而上学的アプローチによつて初めて明らかになつたのではないか。ヴィットゲンシュタインが『論理哲学論考』で設定したのは、まさしく形而上学、従來の形而上学の無意味性を指摘したもう一つの形而上学だつたのではないか。形而上学批判は形而上学によつて初めて可能であつて、それを經驗科学で行なえば形而上学を排除することはできても、批判することはできないのではないかと私には思われる。

三 私以上の意味において、ヴィットゲンシュタインが形而上学的であつたことを評価したいと思うのだが、あくまでも經驗的であらんとしたノイラートには、形而上学であれば、絶對的な完了を先取りするものであれば、いかなるものの混入も承認することはできなかつた。ノイラートは、すべての世界觀と「世界觀をともしなぬ科学」とを識別し、哲学の課題としての概念、命題の明晰化は後者、すなわち科学とわかちがたく結びついた作業であり、そしてそうである以上、科学ではなくて哲学という言葉をもつてこの作業を呼ぶと誤解を生じやすいので、彼はこの哲学という言葉を用いず、代りに統一科学という言葉を使用する。つまり、概念や命題の明晰化は統一科学によつて、そして統一科学において行なわれる作業なのである。

「諸科学は、それらが統一科学にまとめられる時には、以前分離状態にあつた時とまつたく同様の仕方では研究される。……統一科学は、今まで化学、地質学、生物学あるいはまた数学や論理学といった学問体系がそうであつたと同様に、総合的な共同作業の所産なのである。」⁽²⁶⁾つまり、科学本来の特徴である普遍性を科学の専門分化の進む現代において、いかなる形而上学をも排して、すなわち「ア・プリオリで独立した哲学に基づく、さまざまな科学の綜合をめざすのではなく、特殊諸科

学が自力でそれら自身の綜合化のにかわを調達する」ことによつて、確立しようとするのである。絶対性を想定するのが科学でないのと同様に、多様性あるいは特殊性を強調するのも科学ではないのである。この意味で、統一科学はまさしく科学と呼びうるものであらう。

したがつて、統一科学の課題は、さまざまな個別科学間のコミュニケーションを困難ならしめていた障害を排除して、そこに一つの共通のプラットフォームを作りだすことであり、そしてその障害は、各個別科学が同一対象を異なつた言語を用いて呼んでいる点にあるのだから、まず科学の言語を統一しなければならぬ。それは物理主義フィジカリスムに基づいてなされるべきである。なぜなら、「日常生活の言語の意味限定から概して導きだすことの可能な統一科学の統一言語は、物理学の言語である」からであり、共同主観的かつ共同感覚的な言語は、物理学の言語だからである。⁽²⁹⁾

この物理学の言語によつて組み立てられる命題の体系が統一科学の体系なのだが、個別科学の研究は現在の時点で終了しない以上、現在の体系が唯一の体系だとは決していえない。その状態において、「なお依然として可能な諸科学の最大限の調整とは何か。さしあたり与えられうるただ一つの答えは、諸科学の百科全書 *An Encyclopaedia of the Sciences* である。⁽³¹⁾」かくして、ノイラートは『統一科学百科全書』を国際的な規模で編集しようという企てを抱くのである。彼の科学的態度の貫徹は、ここに社会的実践を自らに要求するのであつた。そして実際に、『統一科学国際百科全書』は一九三八年より刊行されたが、彼はこの企てを実現するために、まず「科学の統一をめざす運動」を起した。

(1) 一九六一年に、この英訳の部分が改訳された。その間の事情については、その改訳のみを単独で出版した Ludwig Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, tr. by D. F. Pears and B. F. McGuinness (London: Routledge & Kegan Paul, 1974), p. v を参照せよ。

(2) Ludwig Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus Logisch-philosophische Abhandlung* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1960), S. 11 藤本隆志・坂井秀寿訳『論理哲学論考』法政大学出版局、一九六八年、六一ページ。

(3) Ebenda 同書。

- (4) *Ebenda* 同書。
- (5) *Ebenda* S. 16. 同書六八ページ。
- (6) *Ebenda* 同書。
- (7) *Ebenda* 同書。
- (8) *Ebenda* S. 19. 同書七一ページ。
- (9) *Ebenda* 同書。
- (10) *Ebenda* SS. 32-33. 同書九四ページ。
- (11) *Ebenda* S. 41. 同書一〇六ページ。
- (12) *Ebenda* S. 27. 同書八六ページ。
- (13) *Ebenda* S. 28. 同書八七ページ。
- (14) *Ebenda* S. 115. 同書一九九ページ。
- (15) *Ebenda* 同書二〇〇ページ。
- (16) 碧海・石本・大森・沢田・吉田共編、前掲書、六九ページ。
- (17) Albert E. Blumberg, Herbert Feigl, "Logical Positivism: A New Movement in European Philosophy," *Journal of Philosophy*, Vol. XXVIII, No. 11, May 1931, pp. 282-283.
- (18) *Ibid.*, p. 285.
- (19) Joergen Joergensen, "The Development of Logical Empiricism," *Foundations of the Unity of Science: Toward an International Encyclopedia of Unified Science*, Vol. II, No. 9 (Chicago: University of Chicago Press, 1951), p. 1.
- (20) 市井『哲学的分析』、二二三ページ。
- (21) Schilpp, ed., *op. cit.*, (1963), pp. 45-46.
- (22) カルナップは、ウィットゲンシュタインについてこう語っている。「並はずれた集中力と核心をつく能力とを伴った彼の知力は、宗教および形而上学の領域における多くの命題が厳密にいえはかないことも語っていないのだ、ということを確認していた。彼に特徴的な、自分自身に対する絶対的な誠実さのゆえに、彼はこの洞察に自己の目を閉ざそうとはしなかつた。しかし、この結果は、彼にとつて感情的に極度の痛みを与えたのであり、あたかも最愛の人のうちに欠点のあることを認めるよう強いられているかのごとくであった。シュリックと私は、対照的に、形而上学あるいは形而上学的な神学への愛情をもつていなかったものであり、それだからこそそれらを肉面的な葛藤あるいは後悔なしに捨て去ることができたのである。」(Schilpp, *ibid.*, p. 27.)

- (23) Otto Neurath, "Soziologie im Physikalismus," *Erkenntnis*, Bd. II (1931/2), S. 404. (A. J. Ayer, ed., *op. cit.*, p. 292.) なお、ハイネマンの「Radikaler Physikalismus und & Wirkliche Welt」, *Erkenntnis*, Bd. IV (1934) では、認識は実在と一致したかといって「絶対的な確実性」や「真理の明白な基準」が存在するというシェリッタの主張に対して、「言明は言明と比較されるのであって、「実在」と、「事物」と比較されるのでは決していないのであり、そしてその際に物理主義はプロトロール命題という基準をもっているが、それは最終的に決定されたものではなく、たとえていえば、われわれは裁判官を放棄したのではなく、彼を罷免せざるを得ないことなのだ」と述べられている。(S. 354-355.)
- (24) Otto Neurath, *Erkenntnis*, Bd. II, S. 398. (A. J. Ayer, ed., *op. cit.*, p. 287.)
- (25) *Ebenda* S. 394. (*Ibid.*, p. 283.)
- (26) *Ebenda* SS. 393-394. (*Ibid.*, p. 282.)
- (27) Otto Neurath, "Unified Science and Its Encyclopaedia," *Philosophy of Science*, Vol. IV, No. 2, April 1937, p. 265.
- (28) *Ibid.*, p. 266.
- (29) Otto Neurath, *Erkenntnis*, Bd. II, S. 398. (A. J. Ayer, ed., *op. cit.*, p. 287.) ハイネマンの「物理主義が行動主義的な志向と最もよく組み合わされる」と指摘している。(Ebenda S. 404. *Ibid.*, p. 292.) 心理学が内観的な方法から客観的な方法に移行したことの画期的意義は、「たとえは主体と客体、あるいは精神と物質」とした『存在論的』対立する領域あるいは形而上学的実体を、有機体と環境、あるいは刺激と反応と同一の「それと同じ物理主義的の言う表わされた話想宇宙の範囲内における、単純な二元性あるいは区別によって置き換えたこと」であろう。Egon Brunswick, "The Conceptual Framework of Psychology," *International Encyclopedia of Unified Science*, Vol. I, No. 10 (Chicago: University of Chicago Press, 1950), p. 7. 有機体と環境、刺激と反応の「同一」あるいはそれらを組み合わせることによって人間を説明することが、科学化の側面であるならば、われわれは序論の注(29)と述べたのとは逆に「マックス・ウェーバーが未だ科学的ではなかったと言わねばならない。ウェーバー社会学における行為の意味は、行為者によって主観的に思念された意味であり、その行為者が位置する状況が変化する場合も、その変化を行為者自身が気づく限りで考慮されるわけで、状況の変化という問題には力点が置かれておらず、この状況という考え方はウェーバー社会学には含まれていないからである。(私はその点がウェーバー社会学の欠陥だと批判しているのではない。ウェーバー社会学が、行為者によって思念された意味に徹したことによる意義については、拙稿「政治の発生と消滅——マックス・ウェーバーの『経済と社会』を通して」、慶應義塾大学大学院法学研究科論文集、昭和四十七年度二号を参照された。) ウェーバー社会学に社会的文脈という考え方を加味することを唱えたのは、ポーター・ウインチである。Peter Winch, *The Idea of A Social Science: and its Relation to Philosophy* (London: Routledge & Kegan Paul, 1958), pp. 48-51. 参照。
- (30) Otto Neurath, *Ebenda* S. 398. (A. J. Ayer, *ibid.*, p. 286.)
- (31) Otto Neurath, *Philosophy of Science*, Vol. IV, No. 2, p. 271.

第二章 オットー・ノイラートとドイツ革命

オットー・ノイラートの名は、ウィーン学団の構成員として以外では、今日では、一九三五年から三九年まで毎年開催された「科学の統一をめざす国際会議」の組織者として、また一九三八年より刊行された『統一科学国際百科全書』の発案者ならびに編集者として、さらには視覚教育上の業績であるイソタイプ（国際図解言語教育体系）の考案者として知られている。

しかし、彼はこの他にも一九一〇年代の初期から戦争経済の研究を進め、第一次世界大戦後のドイツ革命の際には経済担当の専門家として、バイエルンの革命政権下で活躍した。この経済学者としての戦争、革命への対応の仕方は、彼における科学と政治を知る上で示唆的と思われるので、その点を中心に本章では彼の一生を簡単に辿り、そして最後に一九三九年九月三日から九日までという、第二次世界大戦勃発直後に、ハーヴァード大学で開催された第五回目の、そしてノイラートが関係した会議としては最後の「科学の統一をめざす国際会議」にホルス・M・カレンが発表した論文をめぐって、大戦終了後『哲学および現象学的研究』誌上で交わされたカレンとノイラートの間の議論をとりあげ、本稿のまとめとしたい。

オットー・ノイラートは一八八二年ウィーンに生まれた⁽¹⁾。その父ヴィルヘルム・ノイラートはウィーン大学で哲学博士号をとり、ウィーンテクニッシェ・ホッホシューレの技術専門学校で政治経済学を教える一方で、ウィーン商業協会の副会長を勤めるといつた実践的な活動にも携わっていた。そのヴィルヘルムがユダヤ教徒だったため、オットーと一九四一年に結婚したマリー・ライデマイスター（クルト・ライデマイスターの妹）は当時を思い起し、皮肉をこめて自分たちの結婚にまつわる「問題点は、オットーが半ユダヤ人で、私が『純粹アーリア人』であるということだった⁽²⁾」と述べている。

オットーは一九〇一年より一九〇五年までウィーン大学とベルリン大学に学び、後者で哲学博士号を取得した。ウィーン大学ではフィリップ・フランク、ハンス・ハーンらとともに数学を学び、ベルリン大学ではロシア人の論理学者グレゴリウス・イテルソンから最も強い影響を受け、彼にならつて、曖昧さの入りこむ一定の言葉の使用を自己に禁ずる習慣を身につけた。当時の彼は「科学的アプローチに専念し、曖昧な話や飾りたてた言い回しはどんなものでも手きびしく批判し、そして執筆の際には著しく自己規律的だつた」⁽³⁾。

一九〇七年にはアンナ・シャピレと結婚し、一九一一年には一人息子ポールをもうけたが、アンナはポール出産後まもなく死亡した。オットーはアンナと結婚した年から第一次世界大戦の始まる一九一四年まで新ウィーン商業専門^{ハンデル・アカデミー}学校で政治経済学を教えていた。一九一二年には当時すでに視力を失っていたオルガ・ハーン（ハンス・ハーンの姉）と結婚した。第一次世界大戦中は、オーストリア・ハンガリー帝国の兵役軍団の一士官として軍務についたが、その間も一九一一年ごろから始めていた戦争経済に関する研究を続けた。

ノイラートにとつて戦争経済の研究を行なうということは、「自由交換経済の時代は終りつつあり、一方で管理経済の時代が始まりつつ」⁽⁴⁾あり、そして戦争こそこの傾向を促進する働きをもつものだという経済学的認識に支えられてのことであり、彼は「父の知的雰囲気なかで育つたので、私はごく若い時から、恐慌と貧困を伴なつた伝統的な経済秩序は、人間を幸福には根本的にしえないという考えでいつばいだつた。私は私の注意を、新たな時代を告げているように思われるあのようなすべての傾向にむけたのである。国家カルテルならびにトラストや同様の組織体が、私には新たな時代の有望な先触れのように思われた。一切の政治生活に反対して、私は何が、作為的に干渉せず、おそらくあるいはたしかに生ずるであろうか」ということに、私心を離れて集中した⁽⁵⁾と述べている。

戦争末期には、彼は戦争省に勤務したが、同時にライプツヒの、模型や図表などを作成していた戦争経済博物館の理事

にも任命された。だが、一九一八年九月末に同盟国側の降伏により戦争が終結し、連合国側との和平交渉が一向に進展せぬ間にドイツ各地で革命が起つた。人々は語つていた。「旧世界は音をたてて瓦解した。新たなるものの創造が合言葉だ。」そして、革命以来「社会化せよ!」⁽⁶⁾という言葉がドイツ中に広まつた。新たな生活秩序の創造こそ、その社会化するということだつた。

このような霧囲みのなかにあつて、ノイラートは、一九一八年一月に王政をくつがえしてバイエルン共和国を誕生させたクルト・アイスナーが自分たちが「空想的で、観念的で、詩人的であ⁽⁷⁾」ることを誇つていたのとは対照的に、現実を凝視していた。「革命の初期には人々はドイツにおける社会主義経済の課題に対する準備が、一九一四年に戦争が勃発した際に人々がそうであつたと同様に、できていなかった。……ドイツ社会民主党は経済綱領を用意していなかったし、社会化に対する明確な要求を提案することができなかった。経済を自覚的に形成するためのいかなる準備も欠けていた。」⁽⁸⁾このような現実認識をもつていた経済学者ノイラートに対して、彼の友人であり、かつ彼の学生であつたヴォルフガング・シューマンは社会化のためのプラン作成、そしてその宣伝を行なうよう勧めた。このことは、いうまでもなくノイラートが社会主義と革命に加担することを意味した。

彼は戦争中にハイデルベルク大学で教授資格をとつていたことや、妻オルガの反対などでかなり悩んだが、「彼は大衆集会で講演することを始めた。彼はきわめて魅力的で、絶大なる印象を与え、彼の講演旅行が凱旋行進のようだつた南ザクセンの鉱山地帯においてはとくにそうであつた。政党の領袖たちや閣僚たちに対して話をするのとは何とちがつていたことだらう。彼らとの間には最もわずらわしい抵抗しか存在しなかつたのだ。ノイラートはミュンヘンでリーフレットを出し始めていたが、その地では彼の考え方は一層多くの反応に出会つた。彼は講演を依頼され、そしてついに社会民主党のホフマン政権が、おもにその通産大臣ヨーゼフ・シモンの熱意によつて、バイエルン中央計画庁を創設し、指導し、そして實際活動に

入るよう、彼に依頼した。彼は受諾した。⁽⁹⁾

その際に、彼は自分の身分が「非政治的な行政家⁽¹⁰⁾」であることを強く望んだが、その理由は、もし行政が政治的に中立とみなされなければ最適任の人物ではなくて、「告訴や死の覚悟のできている人たち⁽¹¹⁾」しか集まらないという、彼自身が明言しているいわば否定的な理由ではなかつたと思われる。

その中央計画庁の長官の地位に彼があつたのは、だが一カ月半ほどで、その間に共産党政権が樹立され、彼はその職務に止まつていたため、その共産党政権崩壊後逮捕され、レーテ共和国を支持した件で一年半の間、要塞に監禁されることになり、中央計画庁は解体され、生産計画のための規則は紙上でしか残らぬことになつたのである。

ノイラートの裁判には証人としてマックス・ウェーバー⁽¹²⁾やエルンスト・ニーキッシュが立つたが、後者は、中央計画庁は法的機関であつて、ノイラートは公務員としてなすべきことをなしたまでであり、彼の仕事とレーテ共和国とを結びつけるのは誤りだと弁護した。⁽¹³⁾一方、ノイラート逮捕、監禁のニュースにオーストリア国内の知人たちが政府に働きかけ、結局オーストリア政府の申し入れで、ノイラートは二、三週間拘留されただけでウィーンに戻る事ができたが、しかし、ハイデルベルク大学における彼の講師職は失われ、そして一九二六年まではドイツに入国することが許されなかつたのである。

ともあれ、ノイラートはこうしてウィーンに戻り、一九一九年から二四年まではウィーンにおける住宅問題に携わり、「住宅供給ならびに都市計画博物館」を創設し、一九二四年から三四年の間には「社会ならびに経済博物館」を創設し、共同研究や共同作業をまとめ上げていつた。この期間には、いうまでもなく、ウィーン学団の研究会に出席し、その存在を世に知らしめるのに大きな役割を果たした。だが、第一次世界大戦の終結のころからファシズム運動がまずイタリアに始まり、次第にヨーロッパ各地に広がり、オーストリアではムッソリーニと結んだドルフスによつて、オーストリア社民党が一九三四年二月にウィーンでの市街戦の末に潰滅させられた。

このような一九三〇年代はじめの政治状況のなかで、ノイラートはウィーン以外の新たな活動拠点をオランダのハーグに求め、まず一九三三年にその地に「国際視覚教育財団」を設立し、翌三四年二月の事件の際、ノイラートはモスクワに凶解統計の紹介の仕事で滞在していたが、ウィーンの警察が彼を逮捕しようとしていることを知り、彼はウィーンには戻らずに、この年より妻のオルガ、助手のマリー・ライデマイスターとのハーグ生活が始まった。一九四〇年五月、オランダがナチス・ドイツに降伏したその日に、今度はイギリスに向けて定員超過の救命艇に文字通り飛び乗り、オランダを脱出するまでの足掛け七年間、ハーグを拠点として視覚教育の仕事を続けてイソタイプの業績を残す一方で、ウィーン学団のメンバーとして抱いてきた統一科学の構想を広め、かつ具体化していった。彼はまず「科学の統一をめざす運動」を起し、そしてその運動のなかの一つの企画として『統一科学国際百科全書』を位置づけた。この両者がまつたく重なるものではないことは、前者を推進するために毎年開かれた国際会議のテーマを見ればわかる。⁽¹⁴⁾

最後に、一九四〇年にイギリスに亡命してからのノイラートの生活について触れれば、ノイラート夫妻（妻のオルガは一九三七年に死亡、マリー・ライデマイスターとはともにイギリスに渡ってから結婚）はあくまで交戦国の人間であつたし、無許可で上陸したこともあつて、抑留生活が半年以上続いたが、一九四一年からオックスフォードで始まつた新生活では、彼らは周囲のさまざまな人たちの口添えで、イソタイプ研究所の設立や、ウィーン時代の経験を生かしてイギリスの住宅、都市問題へのアドバイスなどの活動が続けることができたが、一九四五年二月二日、「机に向つて仕事をしている最中に、卒中の発作が彼を殺した。」⁽¹⁵⁾

(1) 従来、オットー・ノイラートの経歴については、ホルス・M・カレンによる追悼記事 (Horace M. Kallen, "Postscript: Otto Neurath, 1882-1945", *Philosophical and Phenomenological Research*, Vol. VI, No. 4, June 1946, pp. 529-533.) やロビン・の・カーレンの『哲学百科全書』への寄稿 (R. S. Cohen, *op. cit.*, pp. 477-497) などを通して断片的に知るのみであったが、一九七三年に出版された伝記および自伝を含む彼の著作集『経験主義と社会学』(M. Neurath and R. S. Cohen, eds., *op. cit.*) に基づいてノイラートの人間像がかなり明らかになったといえよう。本稿も、ノ

イラーナの経歴についてはほとんど忘れられている。なお、当該書に収録されたものの中で、原文がドイツ語のものはず。Paul Foulkes と Marie Neurath は同じ英訳者である。

- (2) M. Neurath and R. S. Cohen, eds., *ibid.*, p. 68.
 - (3) *Ibid.*, p. 15.
 - (4) *Ibid.*, pp. 123-124.
 - (5) *Ibid.*, p. 124.
 - (6) Otto Neurath und Wolfgang Schumann, *Können wir heute sozialisieren?* (Leipzig: Verlag von Dr. Werner Klinkhardt, 1919), Titelblatt und SS. 5—6.
 - (7) 野村修編『ドキュメント現代史のドイツ革命』平凡社、昭和四七年、一四九ページ。
 - (8) M. Neurath and R. S. Cohen, eds., *op. cit.*, p. 18.
 - (9) *Ibid.*, p. 17.
 - (10) *Ibid.*, p. 21.
 - (11) *Ibid.*, p. 26.
 - (12) 「ヤクスマ・ウーヴナーは証言した、いく分かは彼の有利になるように、いく分かは不利になるように。」(*Ibid.*, p. 17.)
 - (13) *Ibid.*, pp. 28-29.
 - (14) 第一回目の「科学の統一をめざす国際会議」は一九三五年パリで開かれたが、その前年にブラハで準備会議を開き、第一回会議のテーマとしては基礎的な問題の討議、すなわち形而上学から自由な科学理論という意味での『科学哲学』が決定された。(Erkenntnis, hrsg. v. Rudolf Carnap u. Hans Reichenbach, Bd. V(1935), S. 2.)かくして、一九三五年の九月一五日から二三日までパリのソルボンヌ大学で第一回目の会議が、はは一七〇名の人々が二〇ヵ国以上から出席して「科学哲学国際会議」というタイトルのもとで開催された。この会議でノイラーは自らの『統一科学国際百科全書』の構想を初めて公表し、会議はこのプロジェクトに協力することを決議した。(Ebernda, S. 407.)
- 続く第二回「科学の統一をめざす国際会議」は、一九三六年に因果律をテーマにコペンハーゲンで、三七年には再びパリで、第一回目の会議で協力することが決まった『百科全書』との関連で科学上の協力をテーマに、三八年には科学の言語をテーマにイギリスのケンブリッジ大学で、そして三九年にはアメリカのハーヴァード大学で、開催された。Joergen Joergensen, *op. cit.*, pp. 45-48.
- (15) H. M. Kallen, *op. cit.*, p. 523.

結 論 —— オットー・ノイラーにおける科学と政治

アメリカの教育学者ホリス・M・カレンが一九三九年の第五回「科学の統一をめざす国際会議」において、「諸科学間の『統

「一」の意味」と題した演説を行なうことになったのは、その前に彼がノイラートと会談し、ノイラートらの「科学の統一をめざす運動」について彼が抱いた疑問点を、会議の席上で披露してほしいとノイラートが彼に請うたことによるが、その演説をめぐる討論が戦争をはさんで開始されるに至つたのは、『哲学および現象学的研究』誌からの誘いによるものだつた。一九三九年のホリス・カレンの演説の理論的内容については、ノイラートらの意図するところへの理解不足の憾が否めないが、両者間のやりとりをながめていると両者の主張の力点の差異が目につき、その対照性が相互の知的傾向を一層際立たせているように思われる。

カレンにとつて「諸科学間の統一」の問題は、時代状況と切り離しては考えることができない。つまり、「われわれは全体的主義的な時代のなかに生きているのである」⁽¹⁾だからこそ、「科学の統一」をめざすということであらう。つまり、「われわれは何を意図しているのか、統一の意味は何かを明らかにすることがより一層問題化する。すなわち、「自由諸国では、自由放任^{レニヤニエ}という言葉にまつた慣れがしまつて他のどんなことを話すことができなくなつていて大企業の代表者たちは、それにもかかわらず、トラストや独占といった彼らの権威主義的ヒエラルヒーが全国的な経済システムを覆い尽くすまでに、その意味を拡大させている」⁽²⁾そして「他方、独裁諸国では、思想と行動がすでに強圧^{フォース・マヨール}によつて統一され、そしてその新たな統一がありとあらゆる直接的な権力手段によつて多様化から引き離されている。……これらの諸国では、人々の生活や労働が『統一される』だけでなく、彼らの思想も一様化され、芸術や科学もファシズム、ナチズム、コミニズムおよび教権主義の教義の各正統説へと『統一される』。これらの帝国主義的な主張に従わないものは真ではありえず、故意の過失にちがひなく、真理の統一にそむく邪説にちがひなく、したがつて最も苛烈な処罰にあたいし、そして究極的には全体主義の想像力が工夫しうる最も苦しい死にあたいする」⁽³⁾とされている現実がある。だから、「このように意図され、そして遂行されている統一から『科学の統一』は自身のパターン、意図および道具をことごとく、そして完全に区別しなければならぬ」⁽⁴⁾。

このような、科学も全体主義とは無縁ではありえないというカレンの危機意識は、戦争が民主主義諸国の勝利に終つた一九四五年において弱まるどころか、かえつて一層昂まつたのである。すなわち、「われわれは、全体戦争の武器としての科学者と科学の動員のゆえに、もう一つの同様の危機にあるのであり、今まで経験してきたいかなるものよりもさらに厳しく、さらに深く目田科学の方法と作業への危険に満ちているのである。」⁽⁵⁾つまり、問題は、戦後に生きる現在の自分たちにその解決が迫られている問題なのだ、と考えられている。

このようなカレンの思想的な問題提起を受けて、ノイラートはカレンの危機意識には同意するが、「その主要な特徴が反全体主義的な性格を帯びている、われわれの『論理経験主義』を「カレンは」正当には扱っていない」と⁽⁶⁾応え、これまでのその理論的系譜を紹介して、カレンの個々の指摘を理論的に批判する。このノイラートの反論に対するカレンの再反論は、「「ウラニウム」爆弾の製造が、われわれに科学の統一の——軍事的あるいは全体主義の様式という——様式のこの上なく重要な事例を提供している」ということであり、「結局、「企業と学的機関の間の」契約が自由な科学的制度を、あれこれの私的関心をもつた被雇用者にかえており、出版の自由を制限することで彼らは勝利のための機密を私利利潤のための平和時の秘密にとりかえるのである」という認識であり、カレンはノイラートをこのような思想的な問題解決の場に入れようと誘うが、これに対する反論の際には、ノイラートは彼自身の理論的立場を再説するのみであつた。⁽⁹⁾

この齟齬は何を意味するのか。私はこの点を次のように解釈する。ノイラートにとつて、自らの実践的活動は、科学が自らに論理的に要請しているものであつて、科学外的な思想あるいは政治からの要請に基づくものではない。したがつて、自らの実践的活動は非思想的、非政治的なものだ、と考えられていたのではないか。(ノイラートがシュリック、カルナップらに對して行なつた非難は、彼らが実践的な活動に関心を示さず、実践的な活動を行なわないという意味で、彼らを非政治的と評したのであり、行なわれた実践的活動の内容を非政治的だと言つたわけではない。)ノイラートがドイツ革命当時、「非政治的な行政家」であること

を強く主張した理由の一つは、革命政権の指導者集団内部での権力争奪に巻き込まれることを恐れたからであつたが、それのみならず、より本質的には、彼はまさに自らの行為が非政治的なものであると積極的に主張したかつたのであろう。

しかし、自らの恣意、欲望からではなく、科学からの要請によつて行なわれれば、その行為は政治的ではないのか。彼が行なわんとした社会化、つまり生産と消費の管理は、まさに権力を行使するということではなかつたか。O・H・ガブレンツは「権力をめぐる闘争は、権力が行使されるという事実にくらべて第二義的なことである」と述べている。このガブレンツの言葉にしたがえば、「権力の分配や政府の組織はどうあるべきかという問題」⁽¹¹⁾をめぐつてあい争つていた独立社会主義者、民主社会主義者や共産主義者よりも、ノイラートの方がずつと政治の核心をとらえていたといえよう。彼が政治的人間であつたことは、このようにドイツ革命の際に社会化をめざしたからだけではなく、運動の組織化という点でウィーン学団の形成、「科学の統一をめざす国際会議」⁽¹²⁾の推進、「統一科学国際百科全書」⁽¹³⁾の刊行に努力したということからもいえよう。それにもかかわらず、彼自身は自らが政治的人間であることを自覚していない。ザッへに即くことで、ザッへの要求する通りに自らのエネルギーを集中し、政治を創造してゆくことは、その主体が自らの行為を政治的なものと考えているという場合よりもずつと生産的であらう。だが、「政治を一般的に、そしてその上さらに職業として行なわんとするものは」、M・ウェーバーが述べたように、「あらゆる暴力のなかに待ち伏せているもろもろの悪魔的な力と手を結ぶのである」⁽¹⁴⁾。私はノイラートに対しても、「政治は、思想史に現われた主体として、すなわち神の英知をも代行しかねまじき人間と、カインの末裔として神と無縁であるがゆえに存在の重みをもたぬ人間の……本質的に逆説的状况であると考えられる」と言わねばなるまい。⁽¹⁵⁾ザッハリッヒな態度を失わずに、この政治の逆説を凝視するところから初めて、政治の論理Vに対する科学の論理Vではなく、政治の論理Vに対するもう一つの政治の論理Vを構築する作業が始まると私は考えている。

(一) Horace M. Kallen, "The Meaning of «Unity» among the Sciences," *Educational Administration and Supervision*, Vol. XXVI,

Feb. 1940, No. 2, p. 82.

- (2) *Ibid.*
- (3) *Ibid.*
- (4) *Ibid.*
- (5) Horace M. Kallen, "The Meaning of «Unity» among the Sciences, once more," *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. VI, No. 4, June 1946, p. 493.
- (6) Otto Neurath, "The Orchestration of the Sciences by the Encyclopedism of Logical Empiricism," *ibid.*, p. 496.
- (7) Horace M. Kallen, "Reply," *ibid.*, p. 516.
- (8) *Ibid.*, p. 517.
- (9) Otto Neurath, "For the Discussion: Just Annotations, not a Reply," *ibid.*, pp. 526-528.
- (10) Otto Heinrich von der Gablentz, "Macht, Gestaltung und Recht—die drei Wurzeln des politischen Denkens," *Der Kampf um die rechte Ordnung: Beiträge zur politischen Wissenschaft* (Köln und Opladen: Westdeutscher Verlag, 1951), S. 39. 拙訳「権力」社会形成をよむ正義(一)、『未来』未来社、一九七五年七月号、四八ページ。
- (11) M. Neurath and R. S. Cohen, eds, *op. cit.*, p. 18.
- (12) 戦後にちびる「科学の統一」運動にちびる Yehoshua Bar-Hillel, "Unity of Science-1973," *Modern Science and Moral Values: Proceedings of the Second International Conference on the Unity of Sciences* (International Culture Foundation, 1973) を参照された。なお、このバーヒレルの論文が発表された会議は、一九七三年一月東京で開催された第二回「諸科学の統一に関する国際会議」であつたが、この会議は原理運動の指導者文鮮明が創設した国際文化財団にちびる後援されており、参加者の一人はこの会議の模様を「人々は「ひたすら「思想」を語りつとした。『思想』を語りつことは、ひとことも聞かれなかつた」と語っている。(坂井秀寿「科学と哲学——ある国際会議から」、『UD』第三巻第二号、東大出版会、一九七四年、六ページ)『思想』を語りぬことで、ある思想を雄弁に語っていることはノイラートの場合と似ているが、ここで語りぬる思想の内容はノイラートのそれと同一の傾向があるとは決していえないだろう。
- (13) ノイラートなきあとのこの企画を推進したのは、C・モリスとR・カルナップである。この点およびノイラートが秘めていた雄大な構想については、Charles Morris, "On the History of the International Encyclopedia of Unified Science," *Synthese*, 1963, pp. 517-521 を参照された。
- (14) Max Weber, "Politik als Beruf," *Gesammelte Politische Schriften* (Tubingen: J. C. B. Mohr, 1958), S. 557. 西島芳二訳『職業としての政治』角川文庫、昭和三十四年、九六ページ。
- (15) 内山秀夫「政治における発展と統合」、『政治発展の理論と構造』未来社、一九七二年、二六八ページ。